

栎台ヒストリア (史書)

(2019 (令和1) 年度 戸沢村教育委員会 共育課) 1面

開拓民の数奇な歩みと無住の地に建つ開墾記念碑

一、開拓の始まり

三ツ沢集落から東西二二km

の国有林内（通称 屋敷沢）

に、栎台と俗称されていた

開拓地があった。

開墾の始まりは、大正九年（一九二二）と言われて

いるが、当初の入植者は立谷沢村（旧立川町）の人々

が中心で、十三家族が山奥

に入り、畠地を開墾したこ

とからと始まつたという。

大変な苦労により開墾が進み、大豆などの豆類は良く取れたが、家計収入の中

心は「炭焼き」であった。

山形新聞（昭和七年七月一七日）

では、「古口三里の山奥に珍しい原始的部落 国政調査で発見した十六戸 漸く

文教場を作る」との見出で、

「大正一四、五年ごろ立谷

沢村より密かに移住してきたので、古口村役場でもこんな山奥に人家があること

すら知らず一昨年の国政調査で初めて発見されたので

あって、全部落が一家族制度となつて総ての生産品は部落民共有のものとされて

いる全くの原始的な珍しい

部落である」と報じられた

ほど世間からはほとんど注目されることなく、言わば隔離された状態での生活を

営んできたものであつたらしい。

入植年次については、資料により若干異なるが、当初は庄内側からの農繁期だ



(表)
相馬金蔵君 率先事ニ当リ拮据苦心ヲ盡瘁ソ
功七級勲七等 ノ結果燦然其ノ事ヲ開キ其ノ実
長南仁吉君 ヲ結ビ今日ニ至リテ皆其ノ福ヲ
享ケ鼓腹洋洋々タリ吁両氏ノ功績
永ク銘スベキ也

両氏当地開墾ノ有望ナルヲ認メ

（裏） 発起人（三名） 氏名 略
昭和四年月建立
世話人（四名） 同 右
連中名（十四名） 同 右
神職（一名） 同 右

けの、今でいう通勤耕作から始まつたものといわれ、やがて新天地へ夢を託して集落こぞつての移民となつた訳である。

昭和七年（一九三二）七月、栢台分教場が設置されたが、これは開拓者一同の結束、努力の結実ではあつたほか、開墾の中心人物「相馬金蔵」、「長南仁吉」両氏に負うところが大きいとされている。

二、相馬金蔵と長南仁吉

両氏は、標高二四〇mの「栢台開拓地」の開祖とされている。

栢台集落は大正九年、東田川郡立谷沢村の門脇清蔵ら一七名によつて作られたもので、彼らは国有林の払下げ、長南亥吉をリーダーに「製炭」を行う傍ら開墾を進め、粒々辛苦の結果、昭和四年（一九二九）には住宅のほか、分校・公会堂



栢台集落

（現在の集落公民館？）も建つほどになつたという。
相馬金蔵、長南仁吉も同郷（立谷沢村）の人である

が、相馬金蔵の子孫（相馬まつみ氏、古口歴史探訪編纂当時）に聞くと、両氏は栢台開拓の有望なることを

考え、他に率先して開拓事業に当たり、関係筋（営林署など）への交渉等に東奔西走し、未知から成功へと導いたという。

住民は両氏の功績を称え、感謝を込めて、長南亥吉、秋保源次郎、大江慈導（僧侶）氏らを発起人として、

昭和二九年（一九五四）開拓団解散（当時の団員9名）に合わせ、彼らの顕彰碑を建立した。顕彰碑に関する記述は所在も分からず、また、

山形新聞（昭和六二年十月十四日）では、入植者子孫の発意により、開墾記念碑の脇に慰靈柱を建立したとあるが、こちらも三〇有余年の時の流れとともに朽ち果てたものと思われる。

三、満州移民と引揚げ

満州（現 中華人民共和国東北地方）への進出は、日露戦争（一八五〇～五五）以降、活発になり、日本の

帝国主義的施策により昭和七年に満州国が作られ、満州國移民が国策として進められた。

最上郡内で満州開拓移民の計画が本格化したのは、昭和一四年（一九三九）七月からで、満州に第二の最上郡である「満州最上郡」を築こうとしたのである。

そんな中、栎台住民が集落を挙げて満州移民を決意するに至つたきさつとしては・・・

（一）5～6年前と比べ、組合協同積立金の増加

などにより経済好転の兆しは見出せるが、これが部落（集落）更生運動の成果かどうかで考えてみると、その大

半は農林水産物の価格

上昇であり、このこと

がいつまで続くのかを考慮すると、更生運動の根本原因の解決は未だに、と感じる。



栎台開墾

（二）栎台部落の現在収入の7～8割までが製炭だが、製炭資材伐採跡地には年々スギが造林され、（資材確保の）範囲は縮小しており、また、国有林野施業經營案により木炭の資材払下げ量についても限度の状態となつてている。

敗戦により、翌年帰国した旧栎台住民は、山形県庁の強力な勧めもあり、満州移民後、数年の放置ですっかり荒無地と化していた栎台に再び入り、開拓を行うことにしたが、既に山形から食糧増産隊一〇名が入植しており、彼らに合流することになったという。

そして昭和一六年（一九四一）南満州の奉天省昌団建櫻桃村に入植したが、そ

の地は豊穣で広大であり、開拓地は順調に進展したが、突如、移民者にとつては晴天の霹靂ともいいうべき事態が起つた。

すなわち、昭和二〇年八月の旧ソ連軍の対日参戦と太平洋戦争の敗戦であり、移民者たちは開拓地からの引き揚げを余儀なくされたのである。



四、再入植と再び無人の里へ

「家を建てるときは野原にゴザを敷いて寝た。沢の近くに寝た時は蚊がいて寝られたものではなかつた。」

「学校どころの騒ぎでない。住む家さえなく、満州に行く前から建っていた神社の中に泊まつた。それでも入りきれないでの、神社の前に蚊帳を吊つて寝た。家を建てた時に学校も建ててくれたが、屋根も力ヤ、熨斗建ても力ヤ、庭に力ヤを敷いたのが教室で暗くて暗くて勉強なんかできなかつた。集落の大人が教師代わりとなつて教えてくれた。その後で教師が来る前に学校は、やつと立派になつた。」と当時の分校生の作文（旧古口小学校編 七つの分校の子どもたち）や「栃台開拓部落について」（元分校教員西嶋一春氏著）に記されているように、何もない状態での再入植であつたことが伺われる。

その後、やはりと言うべきか、電気もない非常に厳しい生活環境だけでなく、頼みの田畠も気温と水温の低さ、日照時間の不足、痩せ地、傾斜地等々の悪条件のため、入植者自身が「ここでは作物は良くなつはずがない。」というほどの耕作不適地であった。

このため、旧古口村役場でも「古口村農業振興計画（昭和二六年一〇月）により、家畜（役牛、乳牛、縄（メン）羊）の導入による営農計画を立てたが、入植者は既に現金収入となる「炭焼き」に大きく依存しており、また、その後の社会情勢の激変（高度経済成長による都市部への人口移動等？）により離村が相次いだことから、昭和二九年（一九五四）から、栃台分校が廃止され、翌三〇年、栃台は再び無人の里に帰してしまつたのである。



林道脇に記念碑と山神を祀った石碑があるのみで、スギと藪のため、当時の面影を見つけることはできませんでした。その代わり、林内に入った早々、ヤブ蚊の大群に纏わりつかれ、手などを刺されたことから大変辛い思いをし、入植当時の難儀の一端に触れるものとなりました。

（文献 戸沢村史、古口歴史探訪）

